

東洋英和大学院紀要 第16号 (2020年)

なぜキリスト教は「有害な迷信」とみなされたか —ローマ人とキリスト教

島 創平 *

Why did Romans consider early Christianity as a “pernicious superstition”? — the Romans and Christianity

SHIMA Sohei

In his *Annales*, Tacitus wrote about the Great Fire of Rome and persecution of Christians by Emperor Nero in A. D. 64. In this book, he called Christianity a “pernicious superstition (*exitiabilis superstitio*)”. Tacitus’ contemporaries like Suetonius and Plinius Secundus also considered Christianity as *superstitio*. Why did they regard Christianity as *superstitio*? And what does *superstitio* mean?

The Romans called the right religion *religio*, which put priority on public rather than individual interests. Above all, *religio* was an act of prayer aspiring for eternal development and prosperity under the protection of the gods by public worship.

In contrast to *religio*, *superstitio* was a wrong religion that prioritized individual than public interests. Generally, foreign religions were considered as *superstitio*. These religious practices often included human sacrifice and magic which the Romans thought were harmful customs. Especially, the *superstitio* of the Gauls and Germans were all the more dangerous in that they could help make these nations victorious over the Romans and pursued the fall of the Roman Empire.

Apostle Paul recommended submission to the authorities from the viewpoint of Christianity. But he also predicted with the view of eschatology the sudden collapse of Roman “peace and security”. Therefore, some Christians interpreted the Great Fire of Rome of A.D.64 as a sign of coming of the end of the world. In conclusion Romans considered Christianity as a pernicious superstition because it was a religion like the *superstitio* of the Gauls and Germans that predicated collapse of the Roman Empire.

キーワード: ネロ、キリスト教徒迫害、迷信

Keywords : Nero, persecution of Christians, superstition

* 東洋英和女学院大学 国際社会学部 教授
Professor, Faculty of Social Sciences, Toyo Eiwa University

序論

64年7月に起こった「ローマ大火」は、「暴君」と呼ばれる第5代ローマ皇帝ネロの悪行の一つと言われている。通俗的な見方によると、ネロはローマ市を「ネロの都」として建て直すため、或いはかつてのトロイア戦争における「トロイアの陥落」を再現するために、ローマ市に放火し、さらに、「ネロが放火を命じた」という噂を打ち消すため、キリスト教徒に放火の罪を着せて多くの信者を処刑した、と言われている⁽¹⁾。

筆者は以前の考察で、ネロのキリスト教徒迫害に関するタキトゥスの記述を取り上げて、その記述の問題点について検討し、この記述はネロの時代のローマのキリスト教徒の状況を、必ずしも正しく反映していないのではないか、という問題を指摘した⁽²⁾。

すなわちまず第一に、ローマの大火とキリスト教徒迫害を関連付けているのはタキトゥスだけで、タキトゥスより後代のスエトニウスは、ローマ大火とキリスト教徒迫害については、それぞれ別々に記述している。また3世紀の歴史家ディオ・カッシウスは、ローマ大火については記述しているが、キリスト教徒迫害については、全く触れていない。一方、古代のキリスト教の立場からの歴史書においては、ネロのキリスト教徒迫害については記述されているが、それとローマ大火を関連付けているのは、その信頼性が疑わしい5世紀のオロシウスのみである⁽³⁾。他の著述家は、例えばエウセビオスはネロのキリスト教徒迫害に関連して、ネロを「神的なものに対する敬虔の敵対者と宣言された最初の皇帝(『教会史』2.25、秦剛平訳)⁽⁴⁾」と述べているが、ローマ大火については、何も述べていない。

第二に、タキトゥスのキリスト教徒に対する見方は、彼と同時代の2世紀初めのころのローマ人のキリスト教観を反映するものであって、恐らくネロの時代の状況とは異なる、ということである⁽⁵⁾。すなわち、成立当初のキリスト教は、使徒言行録で「ナザレ人の分派⁽⁶⁾」と

言われているように、元々ユダヤ教の一分派として成立したものであり、ネロの時代である1世紀半ばころは、少なくとも外部からは、キリスト教とユダヤ教の区別はおそらく困難であった。両者の区別がより明確となるのは、1世紀後半から2世紀前半にかけての二度にわたるユダヤ戦争以後のことである⁽⁷⁾。

それゆえ前回の論考では、ネロのキリスト教徒迫害については、これはキリスト教という新しい宗教に対する迫害というより、むしろ「ナザレ人」というユダヤ教の一分派に対する迫害と位置付ける方が、当時のキリスト教の歴史的状況に照らしてより正確なのではないか、という結論を提示したが⁽⁸⁾、今回は、別の視点からタキトゥスの記述を取り上げたい。すなわち先に述べたように、タキトゥスは、彼の時代のローマ人のキリスト教観に基づいて、ローマ大火とキリスト教徒迫害を関連付けて記述しているが⁽⁹⁾、タキトゥスはなぜ、どのように、両者を結びつけたのであろうか。一体当時のローマ人は、どのようなキリスト教観から、ローマ大火とキリスト教徒迫害を関連付けたのだろうか。

今回はこうした問題を考える手がかりとして、キリスト教徒迫害についてのタキトゥスの記述を取り上げて検討したい。

本論 I 問題提起

まず最初に、ここでタキトゥスの記述を引用したい。

しかし元首の慈悲深い援助も惜しめない施与も、神々にささげた贖罪の儀式も、不名誉な噂を枯らすことができなかった。民衆は「ネロが大火を命じた」と信じて疑わなかった。そこでネロは、この風評をもみ消そうとして、身代わりの被告をこしらえ、これに大変手の込んだ罰を加える。それは、日ごろから忌まわしい行為で世人から恨み憎まれ、「キリスト教徒」と呼ばれていた者たちである。この一派の呼び名の起因となったクリス

トウスなる者は、ティベリウスの治世下に、元首属吏ポンティウス・ピラトゥスによって処刑されていた。その当座は、この有害極まる迷信 (*exitiabilis superstitio*) も、一時鎮まっていたのだが、最近になってふたたび、この禍患の発生地ユダヤにおいてのみならず、世界中からおぞましい破廉恥なものがことごとく流れ込んでもはやされるこの都においてすら、猖獗をきわめていたのである。

そこでまず、信仰を告白していた者が審問され、ついでその者らの情報に基づき、実におびただしい人が、放火の罪というよりむしろ人類敵視 (*odium humani genere*) の罪で有罪とされたのである。彼らは殺される時、なぶりものにされた。すなわち、野獣の毛皮をかぶされ、犬に噛み裂かれて倒れる。〔或いは十字架に縛り付けられ、あるいは燃えやすく仕組まれ、〕そして日が落ちてから夜の灯火代わりに燃やされたのである。ネロはこの見世物のため、戦車御者のよそおいで民衆の間を歩き回ったり、自分でも戦車を走らせたりした。そこで人々は、不憫の念をいだきだした。なるほど彼らは罪人であり、どんなむごたらしい懲罰にも価する。しかし彼らが犠牲となったのは、国家の福祉のためではなく、ネロ一個人の残忍性を満足させるためであったように思われたからである (『年代記』15.44. 國原吉之助訳、一部改訳)⁽¹⁰⁾。

この記述において、キリスト教は「有害な迷信 (*exitiabilis superstitio*)」と言われており、さらにまた、キリスト教徒は「人類敵視 (*odium humani generis*)」の罪のゆえに罰せられた、と述べられている。このように、キリスト教を「迷信 (*superstitio*)」とみなす見解は、他にも見られる。例えばスエトニウスは、ネロの行った善政の例として、「新奇で有害な迷信に囚われた人類 (*genus hominum superstitionis novae ac maleficiae*)」であるキリスト教徒が罰せられた (『ネロ伝』16.2.) と伝えている⁽¹¹⁾。また、タキトゥスと同世代人である小プリニ

ウスは、有名なキリスト教徒の裁判に関するトラヤヌス帝との往復書簡の中で、キリスト教について「ひどい度外れた迷信 (*superstitio prava et immoduca*)」と述べている (『書簡集』10.96.8.)⁽¹²⁾。

以上のように、キリスト教を「迷信」、「人類の敵」とみなす見解は、2世紀初頭のローマ人のキリスト教に対する見方であった。それではなぜキリスト教は「迷信」と言われたのだろうか。そもそもこの「迷信」という言葉は、どのような意味で使われているのだろうか。次にこの問題について、考えていきたい。

本論Ⅱ *superstitio* と *religio*

superstitio という言葉は、一般に「迷信」と訳されるが、この言葉は、我々がイメージするいわゆる迷信とは異なった意味合いで用いられる⁽¹³⁾。これに関して、キケロは次のように述べている。

実際、わが子が自分より長命であること (*superstites*) を日夜犠牲を捧げて祈っている者たちは、かつて「迷信家 (*superstitiosi*)」と呼ばれ、この名称がその後広く用いられるようになった。これに対し、神々への信仰にかかわるあらゆる問題を注意深く再検討し、いわば「読み直す (*relego*)」ことを行った者たちは、この「読み直す」行為にちなんで「敬虔な者 (*religiosi*)」と呼ばれたのである (『神々の本性について』2.72. 山下太郎訳)⁽¹⁴⁾。

このように、自分の子が親より長命であることといった、自然の秩序に反する、個人的な願いを祈り求めることは「迷信 (*superstitio*)」である。これに対して、正しい宗教は *religio* と呼ばれ、前者は有害 (*extialibis*) であるが、後者はローマ国家を支える真実の宗教を意味する⁽¹⁵⁾。すなわちローマ人は、個人的な事よりも、国家の公共的利益を優先した。これについて、キケロは次のように述べている。

あらゆる社会的連帯の中でもっとも重要で、もっとも大切なのは、国家と我々一人一人との間の関係である。両親は大切である。子供、親族、友人も大切である。しかし、あらゆる人々が大切に思うそのすべての関係を祖国はただ一つで包括している。祖国のためならば、良識ある人物の誰が死地に赴くのを拒否するだろうか。それによって祖国の役に立とうとしないだろうか。(…)しかし、誰にもっとも大きな義務を果たすべきか比較検討してみれば、第一は祖国と両親であろう。われわれが負っている恩義がもっとも大きいからである。次は子供と全家族である。われわれだけを頼りにし、他にいかなる身の寄せ場ももたないからである。これに次ぐのがよく気の合った親族である（『義務について』157～58. 高橋宏幸訳）⁽¹⁶⁾。

以上のように、ローマ人の考えによると、国家よりも個人の利益を優先させるべきではない。彼らの愛する子供さえも、国家の救いの前には、二義的なものである⁽¹⁷⁾。

さらにまた、ローマ人は、ローマは神々の加護によって誕生し、またローマの発展と永続は、神々によって保障されていると信じていた。それゆえ、ローマ人の宗教（religio）とは、何よりもまず第一に、ローマ国家の安寧と永続を、ローマを守護する神々—特にカピトリウムの丘に祀られている、ローマを守護するユピテル、ユノ、ミネルヴァといった神々に祈り求め、神々を讃える公的な宗教的行事に参加することであった⁽¹⁸⁾。

このように、当時の地中海世界において、宗教とは個人的、内面的な信仰よりもむしろ、公共的、外面的な礼拝行為が重視されるものであり、この点で、ローマ人は他の民族に比べて、はるかに勝っていると、ローマ人自身自覚していた。キケロは、ローマは、宗教（religio）を尊ぶ指導者たちによって発展してきたことを指摘し、さらに次のように述べている。

実際、我が国を諸外国と比べた場合、他の点では肩を並べるか劣っている事柄が認められるとしても、宗教儀式、すなわち神々の礼拝をおこなう点にかけては、圧倒的に勝っていると言えるだろう（『神々の本性について』28. 山下太郎訳）⁽¹⁹⁾。

ローマ人の徳である「勇気（virtus）」と「敬虔さ（pietas）」は、このようなローマ人の religio の真実の表現であった。ローマ人が神々への pietas を表し続け、そしてローマ国家の防衛に virtus を示し続ける限り、ローマは永遠に存続し続けるだろう⁽²⁰⁾。

このように、ローマの永続は神々の保護に負っているというローマ人の考えは、さらにポエニ戦争後、ローマ人の地中海世界征服活動が本格化するに従って、ローマの世界支配は、神々の加護の下で与えられたローマ人の使命であるという考えに発展していった⁽²¹⁾。すなわち、ローマの海外支配の拡大は、地中海世界のすべての国家を蛮族の攻撃から守り、さらに野蛮人を人間化し、世界の文明化を精力的に推し進めるというローマ人の使命の遂行であった。それゆえ神々は、ローマ人を世界の支配者と位置づけたのである⁽²²⁾。それは、先に引用したキケロの言葉に表れているように、彼らの宗教心（pietas）が、他の民族に比べて、はるかに優れており、ローマ人が最も優れた人間性（humanitas）を有していたと見なされたからである⁽²³⁾。

以上のように、ローマ人にとって、正しい religio とは、個人の事がらよりも公共の利益を優先し、とりわけローマの国家神礼拝を通じて、神々の保護によるローマの永続と発展を祈願する行為であった⁽²⁴⁾。

一方、迷信（superstitio）とは、先述したように、公共の問題よりも個人の利害を優先させる間違った宗教のことであるが、この言葉は特に外国の宗教に対して用いられた。エジプトのイシス、オシリス礼拝やガリア人、ゲルマン人の宗教そしてユダヤ教も、ローマ人にとっては

「迷信」と見なされた⁽²⁵⁾。すなわち、これらの外国の宗教は、非ローマ的な慣習や信仰を伴っており、その中には人身御供や魔術行為、未来予言など、ローマ人にとって不合理で有害な儀礼や慣習が多く含まれていた⁽²⁶⁾。

このように、これらの外国宗教は、ローマ人の宗教とは異なり、野蛮で不合理な風習を多く含んだゆえに、「迷信」と見なされたが、さらにこれらの中には、ローマが警戒すべき、反ローマ的な傾向を持つ宗教もあった。例えばガリア人のドルイド教は、ローマ人にとって特に危険な宗教であった。ガリア人は、紀元前 387 年にローマ市に侵入、放火活動を行い、カピトリウムを破壊しようとしたゆえに、ローマ人にとって永遠に非難されるべき仇敵であったが⁽²⁷⁾、彼らの宗教であるドルイド教の神官（ドルイダエ）は、ローマ支配の終焉とガリア人の覇権の到来を待望し、予言していた。例えば、ネロ自殺後の内乱において、69 年にローマのカピトリウム神殿が炎上した事件は、ガリア人にとって、ローマ支配の終わりを示すものと考えられた⁽²⁸⁾。これについて、タキトゥスは次のように述べている。

しかし、カピトリウム神殿の炎上ほど彼ら蛮人を興奮させ、ローマ国民の終焉も間近い、と信じ込ませたものは他になかった。

「その昔、ガリア人はローマの都を占領した。しかしユピテル大神の住居は犯されず、帝国は存続した。今や天上の神々は、あの宿命的な火災で憤怒の徴を明かした。人間世界の統治はアルペス山脈の北の民族に約束された。」

このようにドルイダエは空虚な迷信（superstitio vana）から予言していた（『同時代史』 4.54. 國原吉之助訳）⁽²⁹⁾。

同様にゲルマン人も、ローマの敗北とゲルマン人の覇権を待望していた。タキトゥスは、ウェレダというゲルマン人の女子言者について、次のように述べている。

彼女はブルクテリ族出身の処女で、最も広く人の心を支配していた。ゲルマン人は昔からの習慣で大方の女を予言者とみなし、迷信（superstitio）が高じると、女神と崇めていた。

この頃ウェレダの威信は、前にもまして高まっていた。というのも、彼女はゲルマン人の上首尾とローマ軍団の全滅を予言していたからである（『同時代史』 4.61. 國原吉之助訳）⁽³⁰⁾。

以上のように、ガリアとゲルマン人の宗教は、ローマの滅亡を待望する反ローマ的な性格ゆえに、ローマ人の religio とは全く対立する危険な迷信（superstitio）であり⁽³¹⁾、それはまた、ローマ人の人間性（humanitas）と対立する彼らの野蛮さ（immunitas）を示すものであった⁽³²⁾。

本論Ⅲ 初期キリスト教の終末観とローマ支配

以上のように、ローマ人がガリア人やゲルマン人の宗教を正しい宗教（religio）ではなく、迷信（superstitio）と見なした理由の一つは、彼らがローマの滅亡を予言し、待望したことであった。それでは当時の初期キリスト教は、この問題に関して、どのような姿勢を示したのだろうか⁽³³⁾。

ローマ帝国支配の問題に関して、パウロは一方で「人は皆、上に立つ権威に従うべきです。神に由来しない権威はなく、今ある権威はすべて神によって立てられたものだからです（『ローマの信徒への手紙』 13 章 1 節）」と述べ、さらに「すべての人々に対して自分の義務を果たしなさい。貢を納めるべき人には貢を納め、税を納めるべき人には税を納め、恐るべき人は恐れ、敬うべき人は敬いなさい（同 13 章 7 節）」と命じている。ここではローマ帝国支配について直接述べられてはいないが、パウロのこの勧告から、初期キリスト教徒は、全体としてローマ支配には従順であったと考えられる⁽³⁴⁾。

しかしパウロは、他の手紙ではこれとは異

なった姿勢を示している。最も明確なのは、『テサロニケの信徒への手紙1』である。この手紙はおそらく50年代初めに書かれ、パウロの手紙の中では最も初期に書かれた手紙であるが、5章1節以下で、次のように述べられている。

兄弟たちよ、その時間と時期については、あなた方は私たちから（何か）書き送ってもらう必要はない。あなた方自身、主の日は夜の盗人のようにしてやって来るのだということを、正確に知っているからである。人々が「平和だ、そして安全だ」という時、ちょうど胎に（子を）持つ者を陣痛（が襲う）ように、思いがけない滅びが彼らを急襲する。そして彼らは（それを）免れることはないであろう（『テサロニケの信徒への手紙1』5章1～3節、青野太潮訳）⁽³⁵⁾。

ここで出てくる「平和と安全」という言葉は、ギリシア語で“eirênê kai asphareia”、ラテン語では“pax et securitas”と表記されるが、この「平和（pax）」と「安全（securitas）」という言葉は、ローマ帝国支配下での「平和」といわれる「ローマの平和（Pax Romana）」と、ローマ支配下の社会の安定と永続—「永遠のローマ（Roma aeterna）」を讃える言葉であった。当時のローマ帝国内では、こうしたローマ支配下での平和を讃え、その永続を願う言葉が、帝国内各地のローマ皇帝顕彰碑文や、貨幣の銘文などに記されていた。これに対してパウロは、人々が讃えるこうした「ローマの平和」は一時的なものであり、このような偽りの「平和」は、主の日の到来と共に崩壊すると予告している。なぜパウロは、ここで「ローマの平和」の崩壊を予告しているのだろうか。

ここで「平和と安全」の崩壊と共に予告されている「主の日」の到来とは、いわゆる世の終わりにおけるイエス・キリストの再臨の出来事を指す。ユダヤ人は、教団としてのユダヤ教の成立以来、常に終末と共に到来するメシア＝キ

リストすなわち「ユダヤ人の王」の実現を待望していた。イエスの伝道活動は、「神の国は近づいた（『マルコによる福音書』1章15節、『マタイによる福音書』4章17節）」という言葉から始まったと伝えられているように、1世紀のユダヤ人社会においては、終末とメシアの到来への期待が高まっていた。先述したように、当初ユダヤ教の一分派として成立したキリスト教においては、イエスの出来事はメシアの到来の実現であり、十字架と復活の後昇天したイエスが裁き主として再びこの世に再臨する時に、この世に神の国が完成し、終末が成就すると考えられていたが、特に初代教会の時代には、終末の到来の間近さへの期待が、特に強くなっていた。パウロは同じ手紙の中で、「主の来られる日まで生き残るわたしたち（『テサロニケの信徒への手紙1』4章15節）」と述べており、終末は彼の生きている間に実現すると予想していた⁽³⁶⁾。

一方、終末の到来には、様々な天変地異や社会の混乱が伴うことが予告されていた。イエスは終末の徴として、戦争や反乱、地震や飢饉、信者の迫害など、「神が天地を造られた創造の初めから今までになく、今後もし決してないほどの苦難（『マルコによる福音書』13章19節）」が起こり、その後、「太陽は暗くなり、月は光を放たず、星は天から落ち、天体は揺り動かされる。そのとき、人の子が大いなる力と栄光を帯びて雲に乗ってくるのを、人々を見る。そのとき、人の子は天使たちを遣わし、地の果てから天の果てまで、彼によって選ばれた人たちを四方から呼び集める（『マルコによる福音書』13章24～27節）。」と述べている⁽³⁷⁾。

さらにまた、1世紀末に書かれた『ヨハネの黙示録』においては、終末の到来時に起こるバビロンになぞらえられたローマの火による滅亡が、次のように予告されている⁽³⁸⁾。

それだから、さまざまな死と悲しみと飢えとが、たった一日のうちにかの女を襲い、かの女は火でもって焼き尽くされてしまうであ

ろう。なぜなら、かの女をさばかれる神なる主は力強い方だからである (『ヨハネの黙示録』18章8節、小河陽訳)⁽³⁹⁾。

結 論

以上のように、終末の到来と、大きな混乱を伴うローマの滅亡を待望する初期キリスト教の姿勢は、ローマ人からは同じくローマの滅亡を期待していたガリア人やゲルマン人といった蛮族の「迷信 (superstitio)」と共通するものであり、正しい「宗教 (religio)」と全く相いれないものと見なされた⁽⁴⁰⁾。

それゆえ、タキトゥスがローマ大火とキリスト教徒迫害を結び付けたことは、同時代のローマ人にとって、必ずしも不自然なことではなかっただろうと思われる。すなわちキリスト教徒はローマ支配の終焉を待望し、ローマの守護神に対する敬虔さ (pietas) を示さないゆえに、彼らは神々の怒りを招き、ローマ大火を引き起こす要因となった。それゆえキリスト教徒は (たとえ彼らが実際に放火の罪を犯していなかったとしても)、間接的にローマ大火をもたらしした者として、断罪されて当然である⁽⁴¹⁾。タキトゥスの記述においても、ローマ市民がネロのキリスト教徒迫害を非難したのは、ネロの迫害のやり方の残酷さゆえであって、迫害そのものは否定されていない⁽⁴²⁾。

一方ある研究者は、終末の間近さを期待していた当時のキリスト教徒の中には、ローマ大火は終末の到来を告示する「産みの苦しみの始まり (『マルコによる福音書』13章8節)」であり、ローマの滅亡を示す出来事と解釈する者もいたのではないかと推定する。さらにまた、一部の急進的な信徒たちは、ローマの大火を神の裁きの成就ととらえ、終末の実現が間近に迫っているという彼らの確信はますます強まったと思われる。こうした一部のキリスト教徒の熱狂的な傾向が、当時のキリスト教徒とローマ大火を結びつける一因となったという可能性も考えられる⁽⁴³⁾。

以上のような背景から、タキトゥスはキリス

ト教を「有害極まりない迷信」と見なし、また彼らは「人類憎悪の罪」ゆえに、ネロにより、ローマ大火の放火犯として迫害されたと述べて、大火とキリスト教徒迫害を結び付けたのではないだろうか。

最後に残された問題として、ローマ大火とキリスト教徒迫害の史実性の問題がある。先に述べたように、ローマ人がキリスト教をユダヤ教とは別の宗教として認識するようになったのは、早くても1世紀後半～2世紀前半のユダヤ戦争以後のことと考えられ、ネロの時代にはキリスト教とユダヤ教の区別は外からは困難だったと思われる。果たしてネロ時代のローマ人は、どの程度ユダヤ教とキリスト教を区別することが出来たのだろうか。

ローマにおけるユダヤ教とキリスト教の対立が初めて確認できるのは、クラウディウス帝治世下、49年にユダヤ人がローマから追放された事件である。これについてスエトニウスは、クラウディウスは、クレストゥスの扇動により (impulsore Chresto)、絶えず騒動を起こしていたユダヤ人たちを、ローマから追放したと述べている (『クラウディウス伝』25.4.)。このように、当時のローマにおいて、キリスト信仰をめぐってユダヤ人の間に対立が起こったことが報告されている。

次のネロ帝は、ユダヤ教徒に対し、かなり好意的な姿勢を取ったが、これは彼の妻ポッパエア・サピナの影響があると思われる。ヨセフスは、ポッパエアは「神を畏れる人 (theosebês)」であったと伝えている (『ユダヤ古代誌』20.195.)。この言葉は異邦人のユダヤ教改宗者を指す言葉であるが、恐らくポッパエアはユダヤ教改宗者というよりも、ユダヤ教に興味を持ち、ユダヤ教徒の保護者としての立場にあったと推定される。それゆえ、ネロはもしかしたらポッパエアを通じて、当時のユダヤ教の内情について、特に「ナザレ人」と呼ばれたキリスト教徒とユダヤ教徒の対立について、ある程度の知識を持っていたかもしれない。このことから、ネロが終末を待望する当時のキリス

教徒に、放火の罪を着せたという可能性は否定できないと言えよう⁽⁴⁴⁾。

注

- (1) ローマ大火について、当時から失火説と、ネロが大火を引き起こしたとする、ネロ放火犯説があり、タキトゥスはどちらとも断定していないが、後代のスエトニウスやディオ・カッシウスは、ネロが放火したと断定している。最近の研究では、Champlinがネロ放火犯説を主張している (E. Champlin, *Nero*, London, 2003, pp.178 ~ 209)。しかし、多くの研究者はネロ放火犯説を否定している。この問題については、J. Pollini, "Burning Rome, Burning Christians", S. Bartsch, K. Freudenburg, C. Littlewood eds., *Age of Nero*, Cambridge, 2017, pp.213 ~ 222; J. F. Drinkwater, *Nero: Emperor and Court*, Cambridge, 2019, pp.233 ~ 243; 鳥創平『初期キリスト教とローマ社会』新教出版社、2001年、pp.47 ~ 56. 参照。
- (2) 鳥創平「ネロとキリスト教再考」『東洋英和女学院大学大学院 大学院紀要』11、2015、pp.1 ~ 9.
- (3) Pollini, *op. cit.*, pp.230 ~ 231; Drinkwater, *op. cit.*, p.244.
- (4) エウセビオス、秦剛平訳『教会史 上』講談社学術文庫、2010、p.138.
- (5) Drinkwater, *op. cit.*, pp. 245 ~ 247.
- (6) 使徒言行録 24 章 5 節。
- (7) タキトゥスは、キリスト教の開祖 (auctor) が、ティベリウス帝時代に処刑された「クリストゥス (Christus)」という人物であると述べている (『年代記』15.44)。一方、ユダヤ教については、その儀式が古くから保持されてきたと述べており、(『同時代史』5.5)、両者を区別している。
- (8) 鳥、前掲論文、p.6.
- (9) Drinkwater, *op. cit.*, p.244.
- (10) タキトゥス、國原吉之助訳『年代記 下』岩波文庫、2016、pp.269 ~ 270.
- (11) スエトニウス、國原吉之助訳『皇帝伝 下』岩波文庫、1986、p.150.
- (12) 弓削達『ローマ皇帝礼拝とキリスト教徒迫害』日本基督教団出版局、1981、p.41.
- (13) 以下の問題については、L. F. Janssen,

"'Superstitio' and the Persecution on the Christians", *Vigiliae Christianae*, 33, 1979, pp.131 ~ 159. 参照。

- (14) 山下太郎、五之治昌比呂訳『キケロー選集 11』岩波書店、2000、p.134; Janssen, *op. cit.*, p.136.
- (15) *Ibid.*, p.142.
- (16) 中務哲郎、高橋宏幸訳『キケロー選集 9』岩波書店、1999、pp.161 ~ 162.
- (17) Janssen, *op. cit.*, p.140.
- (18) *Ibid.*, p.141; R. L. Wilken, *The Christians as the Romans Saw Them*, New Haven/London, 1984, pp.54 ~ 56.
- (19) 『キケロー選集 11』p.94; Wilken, *op. cit.*, p.56.
- (20) Janssen, *op. cit.*, pp.141 ~ 142.
- (21) *Ibid.*, p.144.
- (22) *Ibid.*, p.145, pp.151 ~ 152.
- (23) *Ibid.*, pp.146 ~ 148; Wilken, *op. cit.*, pp.50 ~ 56.
- (24) Janssen, *op. cit.*, pp.142 ~ 143.
- (25) *Ibid.*, pp.152 ~ 153; Wilken, *op. cit.*, pp.51 ~ 52.
- (26) 後にキリスト教徒に加えられた非難として、テュエステース式食事 (人肉喰い) やオイディプス式結婚 (近親相姦) などが挙げられる。Janssen, *op. cit.*, p.154.
- (27) Janssen, *op. cit.*, p.142.
- (28) *Ibid.*, pp.148 ~ 149.
- (29) タキトゥス、國原吉之助訳『同時代史』ちくま学芸文庫、2012、p.340.
- (30) 前掲書、p.349; Janssen, *op. cit.*, pp.149 ~ 150.
- (31) *Ibid.*, p.151.
- (32) *Ibid.*, pp.148 ~ 149.
- (33) 以下の問題については、鳥創平『初期キリスト教とローマ社会』新教出版社、2001、pp.159 ~ 184; 同『『ローマの平和 (Pax Romana)』と終末論—初期キリスト教のローマ支配観』『史潮』新50、2001、pp.47 ~ 58; 同『『多神教』社会の中の『一神教』—ローマ帝国支配とユダヤ教・キリスト教』地中海文化を語る会編『ギリシア・ローマ世界における他者』彩流社、2003、331 ~ 354. 参照。
- (34) 新約聖書の中でローマ支配への従順を勧めている箇所としては、他に『ペトロの手紙 1』2 章 13 ~ 17 節が挙げられる。
- (35) 青野太潮訳『新約聖書Ⅳ パウロ書簡』岩波書店、1996、p.219.
- (36) 終末の間近さについてパウロが言及している箇所として、他に『コリントの信徒への手紙 1』7 章 29 ~ 31 節、『ローマの信徒への手紙』13 章 11

～ 14 節。

- (37) 並行記事として『マタイによる福音書』24 章 1 ～ 31 節、『ルカによる福音書』21 章 5 ～ 28 節。
- (38) すでにヘレニズムユダヤ教において、火による黙示的終末と偶像礼拝者の永遠の裁きの伝承が見られるが、キリスト教はこの思想を受け継いだ (Pollini, *op. cit.*, p.235; Janssen, *op. cit.*, p.156.)。
- (39) 保坂高殿、小林稔、小河陽訳『新約聖書 V パウロの名による書簡 公同書簡 ヨハネの黙示録』岩波書店、1996、p.251 ～ 252.
- (40) Janssen, *op. cit.*, pp.153 ～ 154.
- (41) Pollini, *op. cit.*, pp.233 ～ 236.
- (42) 本稿 p.2 参照。
- (43) Drinkwater, *op. cit.*, p.246; Pollini, *op. cit.*, pp.234 ～ 235. Pollini は少数のキリスト教徒はローマ大火を黙示的な大火とキリストの再臨預言の実現の始まりと解し、さらに火による裁きの日の現実化を促進する必要があると考え、あえて大火に対する彼らの関与を認めた者もいたのではないかと推定する。
- (44) *Ibid.*, p.234. Shaw は、ネロのキリスト教徒迫害について、ネロのキリスト教徒迫害は、クラウディウスによるユダヤ人のローマ追放の延長上に位置づけられるものであり、それゆえそれは「ユダヤ教徒の一分派」に対する処罰であって、タキトゥスが伝えるような、放火犯としてのキリスト教徒迫害は「神話」とであると主張する (B. D. Shaw, “The myth of the Neronian persecution”, *Journal of Roman Studies*, 102, 2015, pp.73 ～ 110.)